

【海外からの風】

北京・中国社会科学院研修記

丸山 裕美子

2011年度本学学長特別教員研究費（国外）を獲得し、9月から2012年3月までの半年間、北京の中国社会科学院で研修生活を送ってきました。本論集第3号からはじまった「海外からの風」シリーズ第2回として、その折の研修の様子を紹介します。

ところで、なぜ北京なのか、ということをもまず説明しなくてはならないでしょう。私の専門は日本古代史です。けれど、「日本史」といっても、「一国史」では存在しえないことは明かです。「グローバルヒストリー」という言葉を目にすることも多くなりましたが、日本史もまた国際的な交通・交流を抜きにして論じることはできません。

日本の古代は、中国の法典である「律令」を継受したことによって初めて国家が成立したと考えられています。律令は、中国で、統一秦以前に発生し、千年の時間をかけて唐の時代に完成した、きわめて完成度の高い法典です。古代日本の為政者は、この先進的な法典を、大枠ではそっくりそのまま受け入れて、大宝律令を制定しました。大宝律令が完成した701年の元日朝賀の儀礼を記した『続日本紀』は、「文物の儀、ここに備われり」と、律令制国家（律令国家）の誕生を、高らかに宣言しています。制度（律令）だけでなく、古代日本の社会・文化が、中国の影響を強く受けていたことは周知のところでしょう。こうした視点から、私は日唐比較制度・文化研究を続けてきました。

北京にある中国社会科学院歴史研究所隋唐宋遼金元史研究室主任の黄正建氏には、これまでに中国・台湾・日本の学会で何度かお目にかかり、ご教示に預かっていました。最初は2000年中国天津の南開大学で開催された学会で、ついで2004年武漢の武漢大学、2006年は二度、上海の上海師範大学と寧波の天一閣博物館で、2008年北京の中国社会科学院で、2009年には台湾・台北の台湾師範大学で、2010年には日本の東方学会で、それぞれに学術交流を深めていました。

とはいえ、実は私は中国語がほとんどしゃべれませんし（中国語の論文を読

むことはできます)、論文も日本語で書いています。中国の研究者の方々は、私の日本語の論文を読んだ上で、上記の学会に招聘してくださったわけで、発表や討論は常に通訳つきでした。このままではいけない。幸い黄正建氏は日本に留学経験があるため、日本語が堪能です。また社会科学院歴史研究所は、後述するように、中国における唐令研究の中心的存在です。黄正建氏にお願いして、歴史研究所の訪問学者として受け入れていただき、唐令及び唐研究をしながら、中国語も学ばせていただこうと考えたわけです。

具体的な研究計画としては、以下の三つを考えていました。①2006年に公表された北宋天聖令により、失われた唐令を復原し、日本令との比較研究を行い、日本古代律令国家の特質を考察する。そのため天聖令を校訂・公刊した社会科学院歴史研究所において、最新の天聖令研究を学ぶ。②日本古代社会における書儀の受容についての研究を行う。これまで、ドイツ・ベルリンの国家図書館、ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所で調査を行ってきましたが、今回は中国国家図書館所蔵の敦煌文献について閲覧調査しようと考えました。同時に中国における書儀研究の第一人者である北京理工大学の趙和平教授、社会科学院の呉麗娛氏らと意見交換を行うなどの国際交流も深めたいと思っていました。③古代日本文化に大きな影響を与えた中国の文物や遺跡を可能な限り一時間と予算の許す限り一見学してまわる、という計画です。

①については、予定通り、社会科学院で隔週開催されていた「天聖令」読書班に参加して、研究を深めることができました。社会科学院では別に毎月行われていた「中国古文書」研究班にも誘っていただきました。また北京大学榮新江教授のご高配により、北京大学で毎週開催されていた新出の大唐西市博物館所蔵墓誌を読む「隋唐碑志与中古社会」読書班にも参加することができました。

②については、国家図書館が改修中で閲覧はできませんでしたが、かわりにすでに公刊済の敦煌文献の影印版をゆっくり見直すことにしました。社会科学院では呉麗娛氏から最新の書儀研究についていろいろとご教示を得ることができましたし、趙和平氏にも北京大学の研究会でお目にかかることができました。

③としては、房山雲居寺、五台山、西安、長沙、大同、蘇州などに行きました。

首都師範大学と、社会科学院世界歴史研究所で講義をする機会も与えられ、想定していた以上に、多くの貴重な経験を積むことができました。以下に、1. 中国社会科学院歴史研究所について、2. 北京での生活について、3. 北京の研究会・講義について、4. 中国国内研修旅行について、簡単に紹介します。

1. 中国社会科学院歴史研究所について

中国社会科学院は、中国の人文科学・社会科学研究の最高学術機構であり、総合研究センターです。前身は中国科学院哲学社会科学学部で、その基礎のもと、1977年5月に設立されました。前身である中国科学院哲学社会科学学部には、経済研究所、哲学研究所、世界宗教研究所、考古研究所、歴史研究所、近代史研究所、世界歴史研究所、文学研究所、外国文学研究所、語言研究所、法学研究所、民族研究所、世界経済研究所と情報資料研究室等14の研究所がありました。その一つであった歴史研究所の設立は、1954年に遡ります。

現在、社会科学院の主要部門は、北京市の中心部、建国門内大街にあり、歴史研究所はその研究棟の12階のフロアを占めています。先秦史・秦漢魏晉南北朝史・隋唐宋遼金元史・明史・清史の断代史研究室と、文化史・思想史・社会史・歴史地理・中外関係史・歴史文献学と史学史、マルクス史学の分野別の研究室があります。私がお世話になったのは、隋唐宋遼金元史の研究室です。

隋唐宋遼金元史研究室のメンバーは、黃正建・牛来穎・雷聞・陳麗萍（以上隋唐史）、江小濤・梁建国（宋史）、閔樹東・康鵬（梁金史）、劉曉・蔡春娟・張国旺（元史）の各氏、総勢11名で、隋唐史の研究者としては、他に中外関係史の研究室に李錦繡氏が、歴史文献学の研究室に孟彦弘氏がいらっしゃり、また定年をむかえられた呉麗娛氏もほぼ毎週いらしていました（歴史研究所には退官研究者用の研究室も別に一室あります）。

歴史研究所に限らず、社会科学院の研究者は、週1回の会議に出席するほかは、基本的に自宅で研究しています。歴史研究所の場合、会議日は火曜日で、その日はほとんどの所員が来ているのにぎやかなのですが、それ以外の日は閑散としています。



写真1 建国門にある中国社会科学院。手前は図書館棟で奥が研究棟

私は隋唐宋遼金元史研究室に机をいただき、パソコンも使えるようにしていただきましたが、研究室のカギは所員でないと開けられません。ただ隋唐宋遼金元史研究室は、蔡春娟女史がほぼ毎日いらしていたので、私も頻繁に研究室を使うことができ、助かりました。蔡春娟氏は日本への留学経験があって、日本語もできますし、ちょうどご主人が名古屋に単身赴任中であつたということ、私と同じく男の子の母親であるということで話が合いました。

隋唐宋遼金元史研究室の向かいには、歴史学関係の雑誌室がありましたが、図書館は、別棟（新館）にあります。1棟がすべて図書館で、研究所ごとの図書室が各階にあります。歴史研究所の図書室は12・11・9階にあり、12階は古籍善本室で地誌などが所蔵されており、11階には総合閲覧室・出納室・采編室があり、9階は特蔵閲覧室で、徽州文書など社会科学院の所蔵する貴重な文献が納められています。私はもっぱら11階の閲覧室を利用しました。

もっとも図書室は月曜休館で、火～金曜は開館しているものの、開館時間は8:30～16:30、しかも11:30～14:00は長い昼休みで、部屋は閉められてしまいます。5階にある社会科学院全体の工具書閲覧室や4階の雑誌室は昼休みも開いているので、11階を追いつき出されるとこちらに移動して過ごしました。図書はネットで検索できますが、ネットにはあるのに、探しても見つからない本

もあり、週4日しか空いてないことといい、長い昼休みといい、使い勝手はあまりよくありませんでした。コピーが簡単にできないこともあり（所員も200枚の枚数制限がある）、日本とは勝手が違ってとまどいました。

ただCNKI（中国知網）を使えるようにしてもらえたことは、とてもありがたかったです。CNKIというのは、中国の学術情報データベースで、主要学術雑誌や新聞だけでなく、博士論文の全文検索ができます。日本でも国会図書館などでは端末で利用することができ、主要雑誌に掲載された論文や博士論文が、半年たてば全文ダウンロードできるわけで、日本とは違う学術情報環境の整備に驚きました。最近の中国の論文に、博士論文を引用しているものが目につくなど感じていましたが、その理由がわかりました。これでは雑誌は売れないのではないかと心配にもなりました。

歴史研究所の科研処（外事係）所長の齊克琛女士は、さまざまに便宜をはかってくださったし、科研処秘書の博明妹女士は、名古屋大学に留学経験があつて日本語ができるので、資料の閲覧や貸し出し、研究室の利用などわからないことはなんでも聞くことができて心強く感じました。

なお社会科学院には、世界歴史研究所もあつて、日本史研究はそちらに含まれます。世界歴史研究所は考古学研究所とともに王府井の北にあります。私は一度だけ、そちらも訪問して、講義をやらせていただきました。



写真2 隋唐宋遼金元史研究室にて



写真3 研究室のメンバーと

2. 北京での生活について

社会科学院には、長期滞在者用の宿泊施設として、市内中心部から少し外れた—といっても現在は外国人も多く住むおしゃれな新興住宅地らしい—望京という地区に宿舎があります。数棟ある官舎の一棟の一部があてられていて、一月2500元ほどで泊まれるということでした。私も当初はそこに入居するつもりで、5月には一度下見に行きました。ところが、私事ながら、6月に病気が見つかり、手術をする羽目になって、体調を考えると、社会科学院から満員の地下鉄とバスを乗り継いで1時間以上かかる望京に住むのが不安になってしまいました。そこで、社会科学院に徒歩で通える場所にワンルームマンションを借りて住むことにしました。

社会科学院は、北京市の中心部にあり、周囲には外国大使館やその宿舎が立ち並ぶ場所にあります。いわば日本の赤坂とか六本木のような場所で、しかも半年契約はなかなか難しく、結局一月7000元という想定外の出費—社会科学院の先生たちからは信じられない高額だと言われましたが—となりました。

「長安駅」という名前の一名前はとても気に入りました—まだ築1年、入口にはコンシェルジェやガードマンがいるという、一見超高級マンションで、内装（家具・食器・調理具付き）もなんだかとてもおしゃれだったのですが、建て付けの悪さには悩まされました。ドアがまともに開かないし、インターホンは最初から壊れているし（形だけで配線されていない）、廊下の電気は切れているし、TVもつかない（もちろん直してもらいましたが）、インターネットはなかなか繋がらない、お湯の出も悪い、戸棚の引き出しは外れてしまう、きわめつけは、最初から暖房機が壊れていて、11月半ば過ぎの北京で寒さに震えて過ごさなきゃなりませんでした。

これで7000元はないだろうと思いましたが、場所はとても便利で、社会科学院には徒歩15分で行けましたし、地下鉄1号線・2号線の建国門駅、1号線の永安里駅にも徒歩10～15分、また最寄りのバス停は徒歩3分のところであって、北京オリンピック以来ますます整備・拡張をつづける地下鉄・バスを使って、市内はどこにでも自由に行けました。プリペイド式の交通カードを購入してお

けば、これで地下鉄もバスも乗ることができ、しかも地下鉄は一律2元（日本円で25円）、バスにいたっては交通カードを使えば0.4元（5円）です。タクシーなども、日本では考えられないくらい安く、初乗り10元（130円）でかなりの距離を移動できます。王府井、東方新天地、西单、国贸、CBD、三里屯、新城国際、世貿天階、貨貿中心など北京に次々できる最新スポットにも、バスで10～30分で行けるので、快適でした。

もっとも、地下鉄は東京並みに混んでいて、朝夕の通勤ラッシュ時には、乗れなかったり、逆に降りそこねたりしました。乗車・降車のマナーはないといっていいでしょう。むりやり降りなきゃいけないのですが、降車する人がまだ大勢いるのに集団でどっと乗り込んできたりするのです。最初は面食らいましたが、郷に入れば郷に従えて、ずうずうしく人を押しのけて降りたり乗ったりできるようになりました。

食事は、お昼はたいてい社会科学院の食堂で食べました。定食は12元で、日替わり6品のおかずの中から4品を選び、さらにごはん、希望すれば饅頭、ヨーグルトか果物がつきます。お粥やスープも自由によそえます。おかずは野菜をいためたものが中心ですが、肉や魚など動物性蛋白質の含まれた料理が2品含まれ、いずれもなかなか美味でした。定食は麺や水餃子に変更することもでき、包子や粽を売っているコーナーもありました。栄養バランスはとれていると思います。朝食は、最近北京にも美味しいパン屋さんが増えてきていたの、いろんなお店を探して楽しみ、夕食は自宅で自炊。野菜・果物やお肉は、少し高めなのですが、日系の高級スーパーまで出かけて、購入しました。

北京には、朝食用の屋台もたくさんあり、お粥や包子など美味しそうでしたし、地元の市場の方が安くて美味しいと勧められたのですが、お腹をこわすこと、体調を崩すことは絶対に避けたかったので—2000年の天津の学会の際にはひどい目にあいましたので—、多少高くても安心な日系の高級スーパーやデパ地下を愛用しました。それに、高いといっても、日本に比べると、食品の価格はとても安く、とくに果物は種類が豊富でしかも安価で美味しい！おかげで半年間の滞在中、一度もお腹をこわすことはありませんでした。

本の購入は、昔から有名な瑠璃廠にもよく行きましたが—とくに文物出版社

の本を購入するために、王府井にある王府井書店が私にとってはもっとも便利な本屋さんでした。西単にある北京図書大廈の方が規模は大きいのですが、専門書は王府井書店の方が揃っており、最新の専門書は専ら王府井書店で購入しました。

また地壇公園では、季節ごとに大規模な「書市」が開催されており、こちらでは古書や、専門書が格安で買えるので、楽しみでした。もっとも、最近の学生さんたちは、中国アマゾン <http://www.amazon.cn/> などのインターネットで本を購入することが多いようです。私も何度か使いましたが、定価よりずいぶん安く買えますし、日本と同じで、自宅まで届けてくれるので、便利です。

かつて遣唐使たちが「得るところの錫賚（しらい）、尽く文籍を市（か）い、海に泛んで還る」（『旧唐書』日本伝）といわれたのには遠く及びませんが、それなりに必要な本は入手して船便で送りました。

家賃が高くて、部屋の設備がしょっちゅう壊れるのはストレスでしたが、食費と交通費は安く、またアメリカの都市と違って、北京は夜、女性が一人で歩いても安全で、全体としては快適に過ごすことができましたと思います。

3. 北京での研究会・講義について

北京では、最初に書きましたように、主に三つの研究会に参加しました。以下に簡単に紹介したいと思います。詳しくは『東方学』125号（2013年1月）に紹介いたしましたので、そちらをご覧ください。

①天聖令読書班（社会科学院）

天聖令読書班は、『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附唐令復原研究』上下二冊（『天聖令校證』、2006年）を公刊した中国社会科学院天聖令整理課題組のメンバーのうち、黄正建氏（雑令担当）を主持人とし、呉麗娛氏（喪葬令担当）と牛来頤氏（宮繕令担当）がほぼ毎回出席して、隔週木曜日、朝8時30分から11時30分まで、歴史研究所の会議室で開催されていました。

隋唐宋遼金元史研究室で最年少の陳麗萍氏と、秦漢魏晋南北朝史研究室のス

タッフになったばかりの庄小霞氏の若い2人が常連で、他に、私のように歴史研究所で研修中の研究者も若干名参加していました。学生は、社会科学院の碩士・博士課程の院生だけでなく、北京大学・北京師範大学・中国政法大学・中国人民大学・中央民族大学の大学院生たちがそれぞれ1～3人出席しており、だいたい20人前後の会でした。

報告は、学生が担当し、その報告原稿は、毎回、黄正建氏が事前にメールで送っていただきました。どの報告も10000字を超えるような大部の原稿で、また直前に追加が送られてきたりするものだから、研究会が始まるまでに読み通すのはなかなか大変でした。

学生の報告を受けて、まず黄正建・呉麗娛・牛来穎氏らが誤りや疑問点を指摘し、その後、全員で討論するかたちで会は進行了ましたが、主持人の黄正建氏が学生たちに積極的に意見を求め、学生たちも自分の考えをはっきり述べていく様子が印象的でした。

研究会の議論の中で明らかになったいくつかの問題点については、担当した学生が次回までに再度検討した結果を報告したり、関心をもった別の学生が独自にペーパーを作って発表したり、若々しく活発な研究会で、大学の枠を超え、北京の唐代史、宋代史の大学院生が育てられている、という感想をもちました。



写真4 天聖令読書班



写真5 中国古文書研究班

②「中国古文書」研究班（社会科学院）

中国古文書研究班は、「中国古文書学」の確立を目指して、2010年に始まったばかりの研究会です。社会科学院の歴史研究所の中で、唯一、時代横断的な

研究会で、戦国秦漢から明清まで、簡帛学・敦煌学・徽学・黒城学などの研究者が集まり、2011年には、ほぼ月1回のペースで開催されていました。歴史研究所に所属する、鄔文玲氏（秦漢三国の簡牘研究）、黄正建・陳麗萍氏（隋唐の敦煌・吐魯番文書研究）、張国旺氏（宋・西夏の黒水城文献研究）、阿風氏（明清の徽州文書研究）などが主要メンバーで、出席者は毎回10人前後の少人数ながら、中国古文書学を模索して、真摯な議論が行われていました。

私も1回、12月27日に「正倉院文書概論」というタイトルで報告を担当しました。唐代の文書様式に倣って作られた日本の文書や典籍について、日本の正倉院文書を中心に、概説・紹介しました。隋唐宋遼金元史研究室との共催というかたちで行い、社会科学院世界史研究所の日本古代史研究者である徐建新先生が通訳をしてくださいました。唐代の文書や典籍との共通点と相違点に関心が集まりましたが、私も日本と唐の文書様式の違いを再認識しました。

古文書研究を通じて、時代の継続性と断絶、あるいは変化を知ることができるし、相互の比較がなされることによって、それぞれの問題点や課題も明らかになります。また中国古文書学の確立というだけではなく、古文書を共通の素材として、時代と地域を超えたグローバルな視野—中国だけでなく、日本列島や朝鮮半島を含め中国の文書様式に影響を受けたアジア全域—に立って、歴史の流れをとらえることができるのではないかと、そうした大きな可能性を含んだ研究活動であると感じました。

③「隋唐碑志與中古社会」読書班（北京大学中国古代史研究中心）

北京大学歴史学系教授で、北京大学中国古代史研究中心（中古史研究中心）主任の榮新江氏と、中古史研究中心の朱玉麒氏のお二人を主持人として、毎週土曜日午後2時から5時頃まで、北京大学中古史研究中心で開催されていた研究会です。2010年冬から、大唐西市博物館所蔵の新出墓誌500方以上を、北京大学・中国人民大学・首都師範大学・中央民族大学・社会科学院で10のグループを作って整理・釈読にあたり、北京大学・中国人民大学・首都師範大学などは学生も分担して、1人10から20ちかくの墓誌を読んだということでした。今季（2011年秋）の研究会は、その墓誌を使った研究が発表されていました。正

確な釈文を作るためには、単に文字を読むだけでなく、その墓誌の記された歴史的背景を考察する必要があるとの認識のもと、新出史料を縦横に活用した研究発表が行われていたわけです。

近年、開発が進んで、洛陽や西安の大規模な墓域から大量の墓誌が出土し、また骨董市場の高騰ということもあって、歴史的に価値のある、また「書」としての芸術価値もある墓誌が次々世の中に出てくるようになりました。正式な発掘調査によって出土するものは限られていますが、工事現場で偶然に見えたり、盗掘されて市場に出回ったりしたものが、洛陽・西安を中心に大学や博物館に収集されているのです。

未公開の資料なので、研究会はクローズドだということでした。榮新江氏とは17年前に私が日本の正倉院文書研究会で報告した際に、ちょうど来日していた榮新江氏がいらした、という縁ですが、直接お目にかかったのは、そのとき以来だったと思います。それにも拘わらず、よく覚えていてくださって、私が社会科学院に來ていると知って、研究会に來よう声をかけてくださったのには本当に驚きましたし、うれしかったです。

榮新江・朱玉麒両氏の他、北京大学歴史系の羅新氏、北京大学中国古代史研究中心の陸揚氏、史睿氏、中国人民大学歴史学院の劉後濱氏、社会科学院歴史研究所の呉麗娛氏や雷聞氏、また北京大学の国際漢学系列講義のため北京にいらしていた英国・Cambridge大学の麦大維（David McMullen）教授もほぼ毎回出席なさっていました。寧夏文物考古研究所所長の羅豐氏がいらしたこともありました。学生は北京大学、中国人民大学、首都師範大学の大学院生が大勢参加していて、天聖令読書班で馴染みの学生も含め、私が出席した回は、平均35人前後の参加者でした。

研究会での報告内容は多岐にわたり、氏族系譜や婚姻関係、家族史、宗教・信仰の問題、政治史や法制史、文学や書法まで、墓誌研究の可能性がわかります。毎回、水曜日から木曜日にその週の報告原稿がメールに添付で送られてきます。原稿はほぼ完成した状態であるので、事前に読んで研究会に臨むのですが、毎回異なるテーマの報告であり、素材となる墓誌も初めて読むものばかりなので、事前の準備は私にとってはかなり骨の折れる作業でした。報告自体は、報

告者にもよりますが、5分とか15分程度で終えるものもありました。その後、かなり時間をかけて討論する、というかたちでした。

私は研究会に参加してはいたものの、言葉の問題で一中国語が聞き取れず一席上での議論には全くついて行けませんでした。とにかく勉強になったし、いい刺激を受けることができました。榮新江先生は日本語のできる大学院生の田衛衛女史をつけてくださいました。田衛衛さんは天聖令読書班にも参加しており、2012年10月からは日本に留学中です。

また榮新江氏は、貴重な墓誌の拓本を惜しげもなく見せてくださり、2011年に日本で話題になった百濟祢軍墓誌についての最新情報一関連する祢氏の墓三基が新たに発掘されたことなども教えてくださいました。榮新江氏のご配慮には、いくら感謝してもしきれないほどです。

会場の中古史研究中心は、北京大学の校内最も北、朗潤湖の中の島にあって、中庭をもつ四合院風のたいそう趣のある建物です。朱玉麒氏は2010年に新疆師範大学から移ってこれたし、2011年には、米国・Princeton 大学にいらした陸揚氏や、中国国家図書館にいらした史睿氏も、中古史研究中心に異動となっていて、気鋭の研究者が集められている感じがしました。図書館の本も充実しており、ここから中国古代史研究が陸續と発信されていくのでしょう。

なおこの大唐西市博物館蔵の墓誌は、胡戟・榮新江主編『大唐西市博物館蔵墓誌』（北京大学出版社）として、2012年11月に公刊されました。また研究会で報告された論文は、そのほとんどが『唐研究』第17卷「中古碑誌与社会文化」研究専号（2011年12月）と、『文献』2012年第3期（2012年7月）などに発表されています。

以上が北京で私が参加していた研究会の主なものです。この他北京大学で行われていた Cambridge 大学の麦大維（David McMullen）教授による国際漢学系列講座「唐代文史八論」（中国語）を聴講したり、フランス高等研究院歴史学部教授で日本史研究者のシャルロッテ・フォン・ヴェアシュアさんの講義（日本語！）に出席したりしました。シャルロッテさんとは、以前にシンポジウムを一緒にしたこともあり、学会などでも面識がありました。最近日本で翻訳出

版された『モノが語る日本対外交易史 7－16世紀』（河内春人訳、藤原書店、2011年）に基づく講義でした。

自分自身の講義は、首都師範大学と社会科学院世界歴史研究所で行いました。どちらも世界歴史研究所の徐建新氏がコーディネイトしてくださり、翻訳・通訳も含め、徐建新氏にお世話になりっぱなしでした。首都師範大学の劉屹教授には、武漢大学の学会で面識があり、歓迎してくださいました。

首都師範大学での講義の際、25、6人の聴講者の中に、私が12年前に出した本を手をしている学生がいて驚きました。あとで挨拶されてわかったのですが、彼は私が尊敬する中国書儀研究の第一人者、趙和平北京理工大学教授の息子さんと、現在首都師範大学の大学院生なのだったということでした。私が以前に趙和平氏に送っていた本を、今回持参してくれていたというわけです。趙和平氏にも、北京大学「隋唐碑志與中古社会」研究会でお目にかかることができました。

学問、研究には国境はないのだということを実感しました。

4. 研修旅行について

北京はこれまでに3度訪れたことがあり、故宮や天壇、国子監、雍和宮、白雲觀、東岳廟、天寧寺、郊外では万里の長城、明の十三陵（定陵のみ）、清の東陵、遼の独楽寺などには行ったことがありました。今回の北京滞在中には、これまでに行きそびれていた円明園や頤和園に行き、首都博物館には2度、国家博物館には3度通いました。首都博物館は、地下1Fから5Fまである巨大な博物館ですが、東区は封鎖中で、西区のみ展観しました。日本の国立歴史民俗博物館的な展示手法で、レプリカや模型を使っていてわかりやすく面白かったです。国家博物館はちょうどリニューアルオープンしたばかりで、地下の中国古代史（清代まで）の展示は圧巻でした。中国全土から選りすぐりの文物が集められていることがよくわかりました。6世紀の倭国使の姿を描いた「梁職貢図」（11世紀の模写）も、ちょうど倭国使の部分を開いて展示してありました。

郊外では、今回は房山・雲居寺に行きました。社会科学院が車を出してくれて、高速を使って2時間弱で到着。有名な隋・唐代の石経は修復中で見ること

はできませんでしたが、「契丹藏」と呼ばれる金・元代の石経と、「龍藏」呼ばれる清代の木版経をみることができました。遼代の立派な塔もあるのですが、南塔は修復中でした。隋・唐代の石経は、修復後、博物館を作って展示することになるという話でした。石経の山をみると、中国は紙の文化ではなく一紙は戦乱で燃えてしまうので一、石の文化だ、ということであらためて感じました。

北京から離れたのは、①太原・五台山 ②西安 ③上海・蘇州 ④長沙、⑤大同の5回です。以下、それぞれについて少し詳しく紹介しましょう。

①太原・五台山

国慶節の長期休暇中、建築史研究者である天津大学教授青木信夫・徐蘇斌ご夫妻とその学生たちとの旅行に便乗されてもらい、五台山に行きました。青木・徐夫妻とは、同じく建築史を専門にしている妹が東京大学大学院時代の友人であったため、誘っていただいたのです。私たちはゼミ旅行に同行させていただくつもりだったのですが、実は青木・徐夫妻の家族旅行を二人の学生が接待する（！）というもので、夫妻の娘さんや徐さんのご両親も一緒に旅行で、すべてのセッティングは学生が行い、4泊5日の旅行費用も全額学生もちという恐ろしく中国的な旅行でした。北京（西駅）—太原間の往復の新幹線—きわめて快適—も、太原の豪華ホテル—五つ星—も、私と妹は一銭も払わせてもらえませんでした。五台山の移動はすべて学生とその友人の車（オーディ）でした。

学生の一人の母親である郭俊卿氏が、五台山のある忻州市文化局に勤務する考古学者であったため、文化財の閲覧にも便宜をはかっていただき、建築史専門ということで各時代を代表する建築を見学するという豪華コースでした。

まず民国時代の軍閥閻錫山の旧宅に行き、広大な邸宅を見学し、ついで南禅寺に。南禅寺の大仏殿（大殿）は中国現存最古の木造建築ということで、唐・建中3年（782）修造の銘文が梁に残っています。

それから仏光寺。仏光寺は五台山とともに世界遺産に指定されています。清華大学が中心になって保護と研究を行っているそうです。敦煌の壁画「五台山図」にも描かれている寺で、ここの東大殿は、唐・大中11年（857）の建築ということです。堂内には唐代の墨書や壁画も残っています。

五台山の台懷内寺廟群は主に、明・清の建築で、菩薩頂→顯通寺→塔院寺→放生池→万仏閣→殊像寺→碧山寺→龍泉寺とまわりました。お天気は快晴で、うっすら雪をかぶった北台が青空に映えていました。円仁も成尋もこの景色をみたのだと思うと感慨深いものがありました。

忻州の明代城門、金洞寺と山西省博物館にも行きました。とくに金洞寺は、今は無住で鍵がかかっていましたが、特別に開けてもらいました。北宋・元祐8年（1093）創建時の建物が残っていて、驚いたことに、内部の梁・架などほとんどすべてに墨書が見られ、「祝 皇帝万歳衆臣千秋…」などとあるのです。石碑などもごろごろ転がっていて、調査すれば面白いだろうと思いました。



写真 6 五台山（北台）遠景



写真 7 南禅寺



写真 8 仏光寺

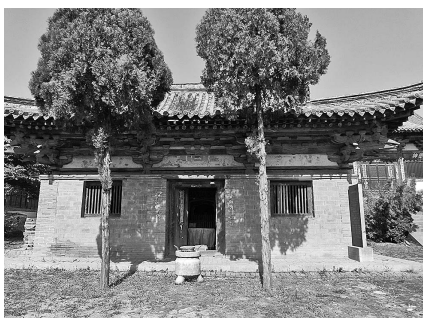


写真 9 金洞寺

②西安

西安には18年前に行ったことがありますが、今回はそのとき行けなかった法門寺に行くこと、復元された大明宮・含元殿跡を見ることが主目的でした。

法門寺には、高速を飛ばして1時間半で行けました。復原された明代の塔の

風鐸が鳴り、塔は青空に映えて美しく、唐代の地宮から出土した金・銀・ガラスの見事な文物を展示する宝物館はさすがにすばらしかったです。ですが、悪名高い新舍利塔には唖然としました。舍利殿だけではなく、金ぴかの巨大な仏像が何体も立っていて（座っていますが）、この趣味の悪さにはあきれてしまいました。もっともこの時代の中国を象徴しているという点で、貴重な歴史的建造物になるのかもしれませんが。

大明宮は、以前はほとんど整備されていなくて、でも基壇の高さは見上げるようで、日本の平城宮と平面では似ていても、実は全く規模が違うのだということを実感できたのですが、今回きれいな公園になったところに行ってみると、いま一つ迫力に欠けてしまっていました。元含殿基壇の復元はたしか日本の奈良文化財研究所などが協力したのだと思います。

他に、久しぶりに兵馬俑坑や華清池、碑林、陝西省博物館にももちろん行きました。兵馬俑坑は、以前は1号坑しか見学できませんでしたが、今は銅車馬、2号坑・3号坑・4号坑（空っぽだが1部が公開）ともみることができます。陝西省博物館では企画展示として豪華な金銀器で有名な何家村の出土品展をやっており、また6月に唐墓壁画館がオープンしており、法外な別料金をしっかりとる（常設展は無料）ののですが、どちらもいい展示でした。

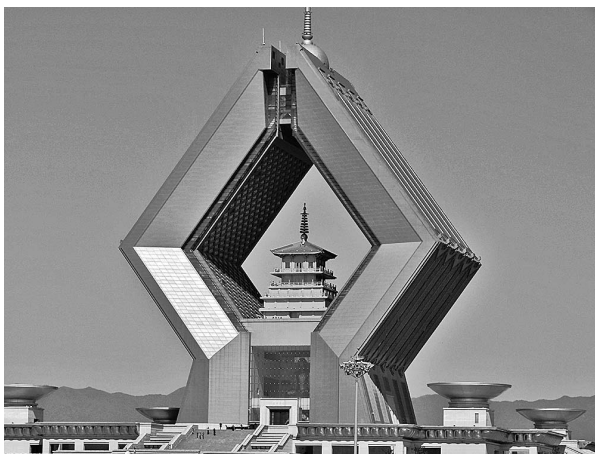


写真10 法門寺新舍利殿。手前の階段に人がいるので、大きさがわかります。

それにしても、北京で生活してから西安に行くとストレスが多かったです。タクシーは高額をとろうとするし、観光地では入場列の割り込みを平気とするし、食事は美味しくないし、郊外のトイレは相変わらずの状況、加えて今回は法門寺までチャーターした車が、帰途西安市内に入ったところで動かなくなってしまうというトラブルにも見舞われました。

また「大唐芙蓉城」とか「漢長安城」といったテーマパークが次々にオープンしています。いずれも集客力は高いようですが、私としては違和感がぬぐえません。当分、西安には行きたくない気分になりました。

③上海・蘇州

お正月休みに上海・蘇州に行きました。上海にはこれまで4度行ったことがあったのですが、蘇州は今回初めてでした。虎丘や獅子林・拙政園など有名な庭園を見学しましたが、冬なので景色は今一つでした。ただ蘇州博物館は小振りながら、洗練された展示で見応えがありました。

④長沙

馬王堆漢墓と簡牘博物館に行きたくて、2泊3日で出かけました。馬王堆漢墓は病院の敷地内にあって、3号墓の墓壙が復原・公開されています。出土品は湖南省博物館にあって、これはさすがに充実しており、すばらしかったです。生きているかのような「湿屍」状態で発見された遺体（前漢の長沙丞相李蒼の妻）は、そのまま見学できるようになっています。

長沙周辺からはこのところ次々に大量の簡牘が出土しており、とくに三国呉簡や里耶木簡などは貴重な文字資料で、日本史の側でも日本の古代木簡との共通性もあって注目を集めています。簡牘博物館はそうした最新の簡牘中心のマニアックな展示で、木簡・竹簡の作成過程をジオラマで復原していました。

10世紀に創設された岳麓書院にも行きました。湖南大学の構内にあり、静かないところですよ。岳麓書院蔵簡牘というのが最近話題になっていますが、これは見ることはできませんでした。



写真11 簡牘博物館

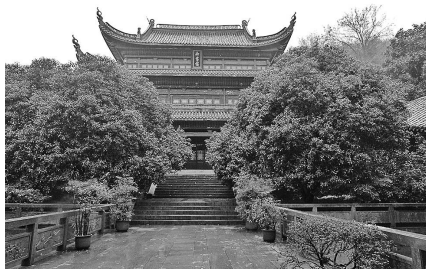


写真12 岳麓書院

長沙は思っていた以上に都会で、バス路線も充実しており、小雪がちらつく寒さでしたが、快適に見学してまわることができました。今年9月、尖閣諸島問題が起きた時に、長沙でも反日デモがあり、TV画面で日系スーパーや日本車が壊されるのを見て、悲しくなりました。

⑤大同

春節休みには、大同に行きました。大同は夜には -20°C の寒さで、長時間外を歩くのは厳しいところでした。行く季節を間違えたと後悔しました。

まず懸空寺へ。大同から1時間かからずに到着しました。断崖絶壁にへばりつくように建てられた寺（もとは道観）で、中に入れるのには驚きましたが、狭くてあぶなっかしく、よくこれで立ち入り禁止にならないものだと思います。鳥取の投入堂に似ています。背後の山は五岳の一つ、北岳恒山で、主峰はさらに奥にあって、ロープウェイで登ることができるということでした。

ついで朔州の応県木塔へ行きました。木塔は、遼代に建立された九重塔で、中国現存最古の木塔として知られています。以前は上まで登ることができたのですが、今は禁止されており、1階部分に入ることができるだけでした。

雲崗石窟はすばらしかったです。イメージとして、龍門より小さいのかと思っていたら、龍門より巨大でした。曇曜五窟の像はいずれも北魏の皇帝を模したものです。砂岩でつくられているため、手前の窟は風化が著しいと聞いていましたが、思っていたほどではありませんでした。

石窟は本当にすばらしいのですが、この1年で村をひとつ潰して作られたエントランスが強烈な違和感でした。りっぱな門、広い駐車場、入口は高級ホテルのロビーのよう。ロビーを抜けると、なんだか陵墓にいく途中の道のように、派手な柱が並んでいて、その先にはこれまた去年できたという大伽藍―人造池や堂舎が立ち並ぶ―があり、さらにその奥に、本物の雲崗石窟があるというへんてこりんな造りになっていました。

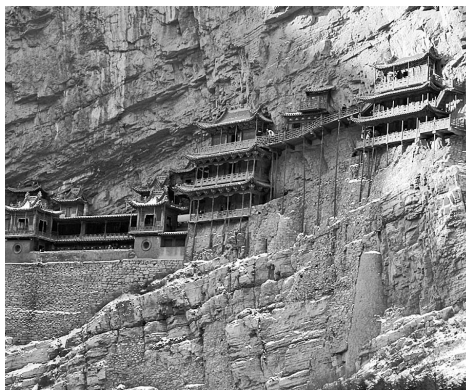


写真13(左) 懸空寺

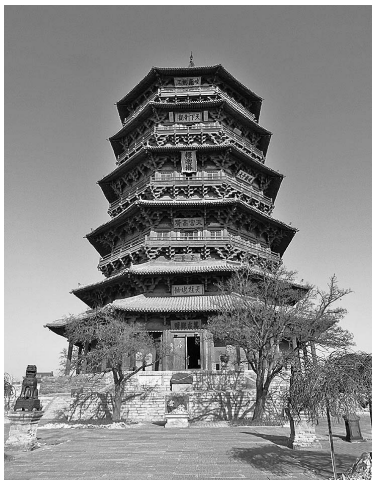


写真14(右) 応県木塔

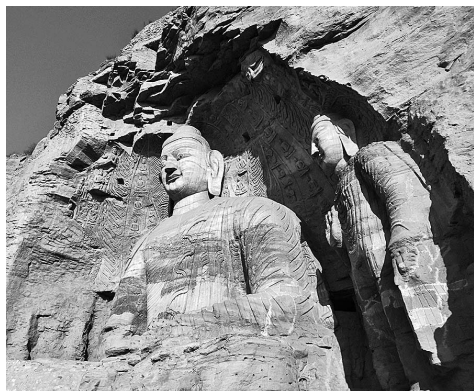
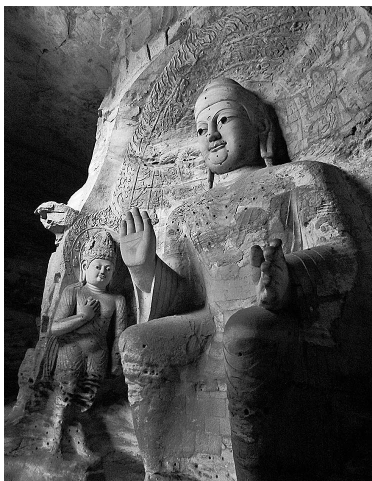


写真15(左) 雲崗石窟(第3窟、初唐)

写真16(右) 雲崗石窟(第20窟、北魏)

大同市内では、九龍壁や華嚴寺へも行きました。華嚴寺はもと上華嚴寺・下華嚴寺の二つの寺だったのですが、これまた去年に一つの寺にして、他にも伽藍をつくって、古い町並みをつくって(そこに骨董品店を入れるつもりらしい)、金ぴかの地下宮殿をもつ塔(地宮には曇曜の舍利を収めている)や、「顔真卿書」という扁額をかかげた文殊閣などもつくって、もとの伽藍配置がわからないものになっていました。

大同は主要産業の石炭中心の町だったのですが、そろそろ陰りがみえてきたこともあり、今の市長さんが観光に力を入れているらしいのです。城壁をすべて復原し—現在南と東は完成、北と西を作っているところでした—、街中の平屋も壊して、新しく「古い町並み」を再現し、新しい寺なども建て、町全体をテーマパークのようにするつもりのものでした。そういえば応県木塔の周辺も新しい「古い町並み」が出来上がっていました。

城壁内は車の進入を禁止して、電気自動車と徒歩で散策できるようにするのだとか。もっとも今の市長さんがやめるとどうなるかわからないということでした。市長はこうして業績をあげて、栄転して省などに行ってしまうそうで、1年かそこらで造られた伽藍が、整備されなくなるとどうなるのか、おそろしい気がしました。

かつて夫の留学について、2年間アメリカ・メリーランド州(首都ワシントンの郊外です)で暮らしたことがありましたが、一人で海外生活をするのは50歳にしてはじめてで、しかもろくに中国語ができないときています。よく考えると無謀な計画でしたが、このような機会はもう二度とないだろうと思い切って、本当によかったです。1年遅かったら、尖閣諸島問題で研修は難しかったかもしれません。

愛知県立大学にはサバティカルという制度がないため、後期の授業を一部前期に振替えて、かつ途中で一時帰国して後期集中講義を行いましたので、実質的には5か月の中国滞在でした。学生のみなさんや歴史文化学科の先生方にはご迷惑をおかけしましたが、おかげさまでとても有意義な留学生活を送ることができました。誌面を借りて、心から感謝申し上げます。

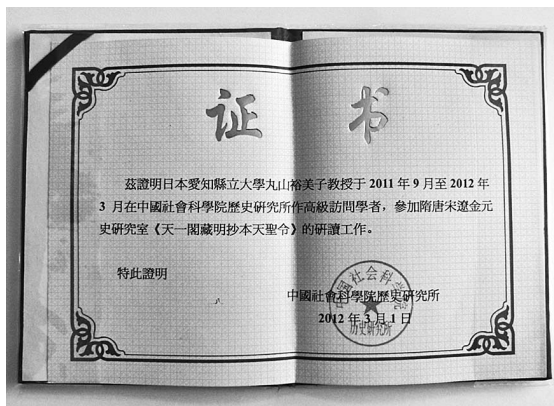


写真17 社会科学院研修証書